

書名：飛ぶ教室

著者：エーリヒ・ケストナー

出版社：岩波書店

出版年月：1962年5月

総ページ数：240ページ

ISBN：4001150549



推薦者

村田 守

鳴門教育大学大学院教授

自然系コース（理科）

多分小学校5年生の晩秋だったと思う。私が通っていた大阪市立晴明ヶ丘小学校の図書室には、岩波から出版されたばかりのリンドグレーンとケストナーの文学全集がそれぞれ鎮座していた。対象学年が中学生ということもあってか、本の奥付の貸し出しカードは白紙のままであった。そこで、「カッレくんの冒険」や「エミール（当時はエーミールと表記していなかった）と探偵たち」をはじめ、片っ端から貸し出しカードにスタンプを押してもらうことにした。そして、冬休みに激しく後悔した。その理由は、高橋健二訳の「飛ぶ教室」に出会ったからで、この本はこれから何度も何度も読み返すことになることになると直感したのに、物語を知ってしまった本を買うことって許されるのだろうか少年の心を悩ませたからである。

大学では、岩波の少年文庫版（高橋健二訳）と英語版 *Flying classroom* の他に独語版 *Das fliegende Klassenzimmer* も持っていたが、流石に独語版を完読することはなかった。大学卒業後も、折に触れて日本語版や英語版を読み返してきた。将来子どもができたなら、私と同様に、この本で友情や家族や責任について学んだり、考えたりすることになるんだろうなあと漠然と考えていた。

娘の読書指導は私の担当なので、その時の遊びや勉強で興味を持っている内容に応じた本を、対象学年とは無関係に与えてきた。秘密基地を作って遊んでいる時には、男女が一緒に秘密基地を作っているリンドグレーンの「名探偵カッレくん」を、3年生で図書室体験を始めた時には、お父さんが最初に学校の図書室で借りた本はロフティングの「ドリトル先生アフリカ行き」で、本に出てくる「おしつおされつ」という動物は英語版には *push pusher* と書いてあるんだという蘊蓄とともにプレゼントしたりした。

小学校4年生の娘のお年玉に、満を持して「飛ぶ教室」を与えたところ、「もう読んだ」と言うではないか。それまでに、お年玉や誕生日のプレゼントにケストナーの「点子ちゃんとアントン」や「エーミールと三人のふたご」を与えていたから、図書室でドリトル先生シリーズやケストナーの本を読み漁っていたらしい。「この本は中学校や高校や大学に行っても何度も読み返すから、持っときなさい」と言うと、不承不承受け取ったので、何とか父の威厳を保つことができた。その娘も将来はきっと自分の子どもに、「この本は、何度も何度も繰り返し読むことになるわよ。だって、面白いんだからあ」と言って「飛ぶ教室」を渡すのだろう。

